

# ウィトゲンシュタインの意味論

## ——その展開と帰結——

黒 崎 宏

### 0. はじめに

ウィトゲンシュタインの意味論は、前期と後期で、大きく変わった。前期の意味論は「意味の対象説」と言われ、後期のそれは「意味の使用説」と言われるものである。そしてウィトゲンシュタインの後期の意味論は、前期のその否定の上に成り立ち、ウィトゲンシュタインの哲学の展開は、彼の意味論のそのような展開——より一般的に言えば、それに伴う彼の言語論の展開——と、一体をなしているのである。

以下において私は、ウィトゲンシュタインの意味論の展開を簡単にたどり、その行き着いた姿を素描してみようと思う。

私のもともとの問題意識は、ウィトゲンシュタインはその後期において、既に1936年に、彼のいわゆる後期の意味論——「意味の使用説」——を確立していたにもかかわらず、その後1949年に『探究』第Ⅱ部が出来上がるまで、えんえんと意味について論じ続けたのは何故か、ということとであった。それに対する私の一つの答えは、彼は、「意味の使用説」を確立した後も、意味を何らかの体験可能なものと考えようとする誘惑を振り払うのに、それだけの年月を要した、ということである。彼が『探究』第Ⅱ部で展開した、「意味体験」、「語体験」、および「アスペクト」についての議論は、全てそのためのものであったと思われるのである。

なお、以下における引用文中の〔 〕は、全て私の挿入である。

## 1. 意味の対象説

前期のウィトゲンシュタインにおいては、

『論考』5：命題は要素命題の真理関数である。

そして、

『論考』4.22：要素命題は名前から成り立っている。それは名前の結合であり、連鎖である。

さて、

『論考』4.01：「要素」命題は現実の像である。

そして、

『論考』2.221：像が表現するものが、その像の意味(Sinn)である。

したがって、要素命題の意味はその要素命題が表わすもの——事態——なのである。一方、

『論考』3.203：名前は対象を意味している。対象は名前の意味(Bedeutung)である。

即ち、要素命題の場合も名前の場合も、意味として、或る存在を考えているのである。ウィトゲンシュタインはこのことを、後に、次のように言っている。

『探究』§ 120：人は意味を言葉と、別ではあるが同じ種類のもののように、考える。ここに言葉があり、あそこに意味がある、[といった様に、である]。

意味についてのこの様な考えが、一般に「意味の対象説」と言われるものである。なおウィトゲンシュタインは、命題の意味を Sinn と言い、名前の意味を Bedeutung と言う。そして次のように言う。

『論考』3.3：命題のみが意味(Sinn)を持っている。名前は、命題というコンテキストにおいてのみ、意味(Bedeutung)を持つのである。

一般には、Sinn は「意義」と訳され、Bedeutung が「意味」と訳されることが多い。しかしここでは私は、いずれをも「意味」と訳し、必要に応じて(Sinn) または (Bedeutung) 付けることにする。

なおウィトゲンシュタインは、前期においてこそ命題と名前を峻別し、それにとまって、Sinn と Bedeutung を使い分けるが、後期においては、これらの区別は次第に曖昧なものになってくる。この点については、後に触れる。

ウィトゲンシュタインは更に、要素命題の真理関数としての命題——即ち、一般の命題——については、次のように言う。

『論考』5.2341：P の真理関数の意味 (Sinn) は、P の意味 (Sinn) の関数である。

## 2. 意味の使用説

ウィトゲンシュタインは以上のような意味の対象説を、後期において、徹底的に批判した。彼は次のように言うのである。

『探究』§ 40：もし人が「ある語の」「意味 (Bedeutung)」という語でもって、その「ある」語に「対応している」ものを指し示しているとすれば、その「意味」という語は不法に使用されているのだ、ということ突き止めることが必要である。【何故なら】それは、名前の意味を名前の担い手 (Träger) と混同しているのである【から】。もし N. N. 氏が死ねば、それは、【N. N. という】名前の担い手が死んだのであって、【N. N. という】名前の意味が死んだのだ、とは言われない。【N. N. という】名前の意味が死んだのだ、と言うことは無

意味である。何故なら、〔そうすると、N. N. という〕名前は意味を持つことを止めたわけであるから、「N. N. 氏は死んだ」と言うことは、意味を持たなくなるからである。

しからば、意味というものはどう考えられるべきなのか。ウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

『青色本』p. 69：言葉の使用に関する先にあげた例について、考えてみよう。〔それは〕「5つのリンゴ」という言葉が書いてある紙片を持って、ある〔使いの〕人が八百屋へ来る〔というものである〕。〔そしてこのような〕現実における (*in practice*) 言葉の使用 (use), それはその言葉の意味なのである。

したがってまた彼は、次のようにも言うわけである。

『探究』§ 43：「意味」という語を用いる——全ての場合ではないとしても——多くの場合において、人はその「意味という」語を次のように説明することが出来る。即ち、ある言葉の意味とは言語〔ゲーム〕におけるその言葉の使用 (Gebrauch) である、と。

ここで大切なことは、言葉の「使用 (Gebrauch; use)」と言うとき、それは言葉の現実における具体的使用である、ということである。即ちそれは言葉の、ある時ある所での使用であって、言葉の使用法とか使用規則ではない、ということである。勿論、言葉の使用は勝手であってはならない。それはある一定の使用規則にしたがっていないといけない。しかし使用規則は個々の使用において示されているのであって、使用規則というものをそれだけ単独に取り出すことは出来ない。現実における事実としては、ある一定の使用規則にしたがっている使用があるのみなのである。そして、「意味」とは「使用」である、と言うときの「使用」とは、この意味での「使用」なのである。

したがって、ある言葉の意味を理解しているということは、その言葉の使用を理解しているということ、即ち、その言葉を使用出来るということ、なのである。一般的に言えば、ある言語を理解しているというこ

とは、その言語を使用出来るということ、なのである。そこでウィトゲンシュタインは、次のように言うのである。

『探究』§ 199：ある言語を理解しているということは、ある技術をマスターしているということなのである。

なお、念のためつけ加えると、私は先の『探究』§ 43 からの引用において、ウィトゲンシュタインの言葉を、「ある言葉の意味とは言語〔ゲーム〕におけるその言葉の使用 (Gebrauch) である」と訳した。この部分は、ウィトゲンシュタインの後期の意味論を簡潔に言い表したものととして、非常によく引用されるものである。原文は次のようである。

Die Bedeutung eines Wortes ist sein Gebrauch in der Sprache.

したがって、直訳すれば、それは次のようになる。

「ある語の意味とは言語におけるその語の使用である。」

即ち私は、「語」とすべきところを「言葉」とし、且つ、言語の後ろに〔ゲーム〕という語を挿入したのである。ウィトゲンシュタインは、後期においては、語と文（前期の用語を用いれば、名前と命題）を峻別していないので、私は、その両方をカバーするものとして「言葉」という語を用い、それにともなって、言語の後ろに〔ゲーム〕という語を挿入したわけである。例えば、先の『青色本』p. 69 からの引用を見てほしい。そこにおいては、「5つのリンゴ」という言葉の現実における使用が、その言葉の意味である、とされている。しかしこの場合、「5つのリンゴ」という言葉は、語であると同時に——その働きに関する限り——文でもあるのではないか。しかもそれは、現実の言語ゲームにおいて使用されているのである。なおドイツ語においては、Wort（語）の複数形 Worte には「文」という意味もある。即ちドイツ語においては、「語」の複数形は「文」でもあり得るのである。そして事実ウィトゲンシュタインは、「文」の意味でしばしば「語」の複数形 (Worte) を用いているのである。なお、語と文の関係については、『探究』§ 19—20 を

も参照のこと。末尾に「付記」として訳を掲げておく。

### 3. 意味の使用説の問題点

「意味の使用説」を「語」について考えてみよう。すると、いろいろな問題が生じて来るのである。例えばウィトゲンシュタインは次のように言う。

『探究』§ 139：誰かが私に例えば「立方体」という語を言えば、私はその語が何を意味している(bedeutен)かを〔一瞬の内に〕知る(wissen)。しかし、私がその語が何を意味するかを理解する(verstehen)とき、その語の全使用(Verwendung)が私の心に浮かぶことなどあり得ようか。〔勿論、あり得ない。〕

それでは、我々がある語を理解する(verstehen)とき、我々の心に浮かぶものは、本来一体何なのか。——それは像のようなあるものではないのか。それは像ではあり得ないのか。

そこで、「立方体」という語を聞いて、君にある像が浮かんだとしよう。例えば、立方体の見取り図が〔浮かんだとしよう〕。どのくらい、この像は「立方体」という語の使用に適合し得るのか、或は、適合し得ないのか。——おそらく君は言うであろう：「それは簡単だ；——もし私にその像が浮かび、そして私が例えば三角プリズムを指し示して、これは立方体である、と言え、〔「立方体」という語の〕この使用はこの像に適合しない。」——しかし、適合しないであろうか。〔立方体の〕像が〔三角プリズムに〕適合するような投影方法(Projektionsmethode)を想像することは、全く容易である。だからこそ私は、意図的にこの例を選んだのである。

立方体の像は勿論我々に〔「立方体」という語の〕ある使用を示唆する。しかし私はその像を別様にも用い得るのである。〔したがって、立方体の像は「立方体」という語の使用に、適合するもしないもないのである。〕

したがって、我々がある語を理解するとき、我々の心に浮かぶものは、我々のその理解とは本質的には関係ないのであろうか。即ち、「理

解」するという事と、「何かが心に浮かぶ」という事とは、本来無関係なのであろうか。

そこで一般に、何かを一瞬の内に把握する、知る、理解する、というとき、一体そこでは何が生ずるのかについて、もう少し分かりやすい別の例で考えてみよう。

#### 4. 「一瞬の内に把握する」(はっとわかる)ということ

ウィトゲンシュタインは次のように言う。

『探究』§ 151: さてしかし、「知る(wissen)」という語の次のような使用(Verwendung)も存在する: 我々は「や、わかった! (Jetzt weiss ich's!)」と言う。——そして同様に、「あ、出来た。(Jetzt kann ich's!)」とか、「や、わかった! (Jetzt versteh ich's!)」とかとも言う。

我々は以下のような例を想像しよう: A氏が数列を書く: B氏がそれを注視して、その数列の中にある法則を発見しようと努める。B氏がそれに成功すれば、彼は叫ぶ: 「や、私にはその先が続けられる! (Jetzt kann ich fortsetzen!)」——この能力、この理解は、かくして、一瞬の内に (in einem Augenblick) 生じた或るものである。

そこで我々は、ここで生じたものは何であるかを調べてみよう。——A氏が数を1, 5, 11, 19, 29, と書いてゆく; ここまで来たときB氏が言う、「もう先は分かっている」と。ここでは何が起こったのか。様々なことが起こり得た; 例えば: A氏がゆっくりと数を順に書いてゆく間、B氏は書かれた数に合う代数式をあれこれと試みてみた。A氏が19を書いた時、B氏は  $a_n = n^2 + n - 1$  という式を試みた; そして次の数29が彼の仮説を確かめた。

或はしかし: B氏は式については考えなかった。彼はある緊張感を持って、如何にA氏が数を書いてゆくかを注視した。その際、あらゆる漠然とした思いが脳裏を駆け巡った。ついに彼は自問した: 「隣同士の差の数列は何か。」彼はそれが、4, 6, 8, 10であることを発見した。そこで彼は言った: 「もう先を続けることが出来る。」

或は、彼はちらっと目をやって言った: 「なんだ、その数列なら知

っている。」——そして彼はその先を続けた；それは丁度、A氏が〔奇〕数列1, 3, 5, 7, 9を書いたときに行なったであろうように、である。——

或は、彼は何も言わず、ただその数列の先を書いた。おそらく彼は、「そんなの簡単だ！」といった感覚を持っていたであろう。

『探究』§ 155：かくして我々は次のように言いたい：彼が突然数列の先を知ったとき、或は、数列の仕組みを理解したとき、彼はおそらく或る特別な体験をしたのである。——人が彼に「君がその仕組みを突然理解したとき、そこで起こったことはどうであったのか。」と問えば、彼はその体験を例えば、我々が先に記述したのと同じように記述するであろう。——しかし、その様な場合において、彼は数列の仕組みを理解している、とか、彼は数列の先を知っている、とかと言うことを我々に正当化するものは、彼がその様な体験をした 諸状況 (Umstände) なのである。

『探究』§ 179：我々の場合 (§ 151) に戻ろう。明らかに我々は、B氏に式が思いついたからといって、彼には「や、その先は分かった。」と言う権利がある、とは言わないであろう。——そう言えるのは、式が思いつくこと——そして、口に出して言ったり書いたりすること——と、実際に数列の先を続けることの間に、関係が経験的に成り立っているときのみである。そして、その様な関係は実際明らかに成り立っている。——さて人は、「私にはその先が続けられる。」という文は、「私は、経験によれば数列の先を続けてゆく事を可能にする体験をした。」ということと同じことを言っている、と思うかもしれない。しかしB氏が、「先が続けられる。」と言うとき、彼はその様なことを思っていたであろうか。そのとき、彼の心にはその様な文が浮かんでいたであろうか。或は彼はすでに、彼が思っていることの説明として、その様な文を与えようとしていたであろうか。

そうではない。「や、その先は分かった。」という文は、彼に式が思いついたとき、正しく用いられたのだ、とはいえ、それは、或る状況においてのことである。即ち、彼は代数学を学んでおり、その様な式を既に以前に用いていた、という状況においてのことなのである。



——しかしこのことは、「や、その先は分かった。」という言明は、我々の言語ゲームの舞台を構成する全状況の記述の短縮形にすぎない、と言っているのでもない。——如何に我々は、「や、その先は分かった。」とか、「や、私にはその先が続けられる。」とかいう表現の使用を習うのか；言語ゲームのどんな家族において我々はそれらの使用を習うのか、ということについて考えよ。

我々はまた次のような場合をも想像することが出来る：おそらくほっとした感情をともなつて——突然「や、その先は分かった。」と言った以外には、B氏の心には全く何も生じなかった；しかも彼は、式を用いずに、数列の先を實際続けて行つたのである。そしてこの場合にも我々は——ある状況の下では——彼はその先を知っていた、言うであらう。

『探究』§ 183：しかし、どうであらう——先の場合 (§ 151) における「や、私にはその先が続けられる。」という文は、「今、私には式が思いついた。」とか、或はその他の何かと、同じことを意味していたのであろうか。我々は、後者は、その様な状況の下では、前者と同じ意味(Sinn)を有している(同じことを行なう)、と言うことが出来る。しかしまた我々は、一般には、それら両者は同じ意味(Sinn)を有しはしない、と言うことが出来る。我々はまた次のようにも言う：「や、私にはその先が続けられる。」ということである；それは丁度我々が以下のやうに言うのと同じである：「私は行く事が出来る。」とは「私には時間がある。」ということである；或はまた：「私は行く事が出来る。」とは「私はもう十分元気になった。」ということである；或は：「私の足の状態に関しては、私は行く事が出来る。」と言うのは、我々が行く事に関するこの〔足の〕条件を他の条件と対置しているとき、である。しかしここで我々は、(例えば、ある人が行く、といった)事柄の本性に対応して、その全条件の総体が存在し、もしそれが全て満たされるならば、彼はいわば行かざるを得ない、などとは信じないように、用心しなくてはならない。

ウィトゲンシュタインによれば、数列の仕組みを「一瞬の内に把握し

た」、ということは、その数列の先を続けることが「出来る」、ということであって、何らかの心的出来事が生じた、という事ではないのである。そして、それを正当化するものは、そう言われるときの状況なのである。そしてこのことは、勿論、語の意味についても当てはまる。人が、ある語の意味を「一瞬の内に把握した」ということは、その人はその語を正しく使用出来る、という事なのであって、何らかの心的出来事が生じた、という事ではないのである。しかし現実には、何らかの心的出来事が生じるものである。そこで問題は、語の意味を一瞬の内に把握した、という事と、そのときに生ずる何らかの心的出来事、および、それらの間の関係についての、より一層の考察である。

## 5. 意味体験と語体験

語の意味を一瞬の内に把握した、という事を「意味体験 (Bedeutungs-erlebniß)」と言い、そのときに生ずる何らかの心的出来事を「語体験 (Worterlebniß)」と言うことにする。すると問題は、「意味体験」と「語体験」、および、それらの間の関係についての、より一層の考察である。ウィトゲンシュタインは次のように言っている。

『探究』 p. 175: 意味 (Bedeutung) を体験 (Erleben) すること、と、表象像 (Vorstellungsbild) を体験すること。人は言うであろう: 「人は、両者において、ただ何か違ったものを体験するだけだ。ある違った内容が意識に提示される——彼の前に立ち現われる——のである。」——表象体験 (Vorstellungserlebniß) の内容とはどういうものか。それは像あるいは記述である。しからば意味体験 (Bedeutungserlebniß) の内容は何か。〔これに対しては〕どう答えるべきか、私は知らない。さきの「〔 〕内の」文章が何らかの意味を有するとすれば、それは、〔「表象体験」と「意味体験」という〕二つの概念は、「赤」と「青」という二つの概念がそうであるように、互いに似た振舞いをする、ということである。しかしこれは誤りである。

何故か。ウィトゲンシュタインは言う。

『探究』 p. 176：人は意味 (Bedeutung) の理解を表象像のようにしっかり保持することが出来るか。即ち、語の意味 (Bedeutung) が突然私に思い浮かぶとき、——それもまた、[表象像のように] 私の念頭に浮かんだまま動かない、ということが可能であろうか。

勿論、不可能である。それは、次のような場合と似ている。

『探究』 p. 176：私は叫んだ、「や、決まった！」——それは突然のひらめきであった：それから私はその計画を細部にわたって説明する事が出来た。この場合、何がそのまま留まっていなくてはならないのか。おそらく、ある像であろう。しかし、「や、決まった！」と言うことは、像を持つ、ということの意味してはいなかった。

意味の場合も同様である。ある語の意味を一瞬の内に把握した、ということは、像を持つ、ということの意味してはいないのである。そこでウィトゲンシュタインは問う。

『探究』 p. 176：語の意味 (Bedeutung) が念頭に浮かんで、二度と忘れなかった人、その人は今やその語をその〔意味の〕仕方で使用することが出来る。

意味が念頭に浮かんだ人、その人は今や意味を知っているのである。そして、〔意味が〕念頭に浮かぶということは、〔意味を〕知っているということの始まり、であった。しからば、意味が念頭に浮かぶということは、〔表象が念頭に浮かぶという〕表象体験と何処がどう似ているのか。

両者はとにかく体験である。しかし、意味が念頭に浮かぶ、ということとは、今やその語をその〔意味の〕仕方で使用することが出来る、という能力の獲得であって、それ以外に何らかの体験内容を有するわけではない。勿論一般には、意味が念頭に浮かぶとき、同時に、何らかの体験内容がちらっと念頭をかすめることがある。そして、「あ、そうか。」などと呟くこともあろう。更には、ある一定のイメージが念頭に浮かんだまま離れない、という事もあるかもしれない。しかしそれらは、意味が

念頭に浮かぶ、ということに対して、必要でも十分でもない。それらは、唯一般に、意味が念頭に浮かぶ、という事に随伴して生ずる現象に過ぎないのである。ウィトゲンシュタインは、意味が念頭に浮かぶ、ということ「意味体験」と言い、一般に、それに随伴して生ずる上記のような現象を「語体験」と言うのである。先にウィトゲンシュタインが「表象体験」と言ったのは、「語体験」のことである。

## 6. 通常の使用における語と文の意味

以上では我々は、語を、文から切り離して、孤立した状態で取り扱っていた。しかし、勿論一般には、語は文の中で用いられるのである。しからば、その場合はどうなのであろうか。この点については、ウィトゲンシュタインは次のように言っている。

『探究』p.176:「シュヴァイツァーはシュヴァイツァー〔スイス人〕ではない。」と言うとき、私は第一の「シュヴァイツァー」は固有名詞であり、第二の「シュヴァイツァー」は普通名詞である、と思っている。しからばこのとき、(私が先の文をオウムのように発音しているのでない限り) 第一の「シュヴァイツァー」においては、第二の「シュヴァイツァー」においてとは何か違ったものが、念頭に浮かばねばならないのか。——第一の「シュヴァイツァー」は普通名詞であり、第二の「シュヴァイツァー」は固有名詞である、と思ってみよ！——如何にすればそう出来るのか。〔しかし、いずれにせよ〕私がそうするとき、私は、それぞれの「シュヴァイツァー」という語において、それぞれの交換された意味を念頭に思い浮かべようとして、緊張のあまり目をしばたいてしまう。——しかしだからといって私は、語の通常の使用(Gebrauch)においても、その意味(Bedeutung)を念頭に思い浮かべるであらうか。

勿論、思い浮かべはしない。だいたい、語の通常の使用においては、意味というものが念頭に思い浮かぶということは無いのである。意味というものが念頭に思い浮かぶのは、何らかの人工的な問題設定のとき、或は、特に何らかの問題が生じたとき、なのである。それは丁度、胃が

意識に浮かぶのは、胃に何らかの問題が生じたときであるのと、似ている。我々がシュヴァイツァー氏について語るとき、我々は端的にシュヴァイツァー氏について語るのであって、そこには、「シュヴァイツァー」という語の意味なるものが、事新しく意識される余地は存在しない。我々がシュヴァイツァー氏について語るとき、もし「シュヴァイツァー」という語の意味なるものが事新しく意識されるとすれば、我々は「シュヴァイツァー」という語を、実は、語としてではなく意味無しの記号として、一度意識しなくてはならない。しかし勿論、その様なことは、通常の使用においては有り得ない。通常我々は「シュヴァイツァー」という語を、意味のある語として使用するが、しかしその際、その意味について事新しく意識する事はないのである。語の意味というものは、通常の使用においては、意識に対して透明なのである。

この事は、他人の場合にも同様である。ウィトゲンシュタインは次のように言っている。

『探究』p.176：もし私が「シュヴァイツァーはシュヴァイツァー〔スイス人〕ではない。」という文を〔先の〕交換された意味で言えば、私にはその文の意味 (Satzsinn) は崩壊してしまう。——さて、その文の意味は、私には崩壊してしまうが、しかし私の話相手である他人にとっては、崩壊しはしない。そうすると、交換された意味で言うことには、どんな不都合があるのか。——「しかし、たとえ何か不都合なことがあったとしても、文が通常の仕方で発音されるならば、〔他人には〕ある一定の別の事が、まさに起こっているのである。」——この際、かの「意味を念頭に思い浮かべる」ということは生じていない。

もし私が通常の仕方の発音で、「シュヴァイツァーはシュヴァイツァーではない。」と言えば、他人はそこから端的に「シュヴァイツァー氏はシュヴァイツァー〔スイス人〕ではない。」という情報を受け取る。彼は一度「シュヴァイツァーはシュヴァイツァーではない。」という声あるいは音を聞いて、その意味は、「シュヴァイツァー氏はシュヴァイツァー〔スイス人〕ではない。」という事である、と思うわけではない。その様な意味を事新しく念頭に思い浮かべるわけではな

いのである。語の場合と同様に、文の意味というものも、通常の使用においては、意識に対して透明なのである、と言えよう。

かくして、語にしる文にしる、通常の使用においては、いちいちそれらの意味なるものが意識されるわけではない。その意味で、語や文の意味なるものは、一般に意識に対して透明なのである。したがってそれらは、通常の使用においては、体験されるものではないのである。この点について、ウィトゲンシュタインは次のように言う。

『探究』p. 181 : [語の] 意味 (Bedeutung) は、語を聞いたり発音したりするときの体験ではない。そして文の意味 (Sinn) は、この体験の複合ではない。——(「私はいまだかつて彼に会ったことがない。」という文の意味 (Sinn) は、その文を構成している語の意味 (Bedeutung) から、如何に構成されているのか。) 文は語から構成されている。そして、これで十分である。

我々は一般に、語を孤立して聞いたり発音したりするとき、何らかの体験をする。それは、意味体験であったり、語体験であったり、であろう。しかし、それらの体験が語の意味の体験であるわけではない。意味は体験に対して透明なのであり、体験されるものではないのである。したがってまた、「意味体験」とは、意味を体験することではないのである。

## 7. 意味盲

「意味体験」とは、ある語が与えられたとき、その語の意味を一瞬の内に把握した、ということである。「はっと分かった」ということである。しかしそれは、その語をその意味の仕方で使用する能力を獲得した、ということであって、それ以外に何らかの体験内容を有するわけではない。したがって、「意味」とは「使用」であるとはいえ、意味体験とは使用の体験である、というわけでもないのである。かくしてウィトゲンシュタインは次のように言う。

『探究』§ 138 : さてしかし、我々がある語を聞く、或は発するとき、

我々はその語の意味 (Bedeutung) を理解する (*verstehen*) ; 我々はその語の意味を一瞬の内に (*mit einem Schlage*) 把握する ; そして我々が一瞬の内に把握するものは、時間の内に延長している「使用 (*Gebrauch*)」とは別のあるものではないのか !

ウィトゲンシュタインは「意味体験」という概念によって、「意味盲」という概念を定義した。彼は、意味体験が不可能な人のことを「意味盲」と呼んだのである。即ち意味盲とは、ある語が与えられたとき、その語の意味を一瞬の内に把握すること、はっと分かるということ、が不可能な人のことなのである。そしてウィトゲンシュタインは次のように問う。

『探究』 p. 214 : 語の意味を体験しない人には、〔一体〕何が欠如しているのか。

彼はその様な人として、次のような例をあげて、言う。

『探究』 p. 175 : 語「sondern」は動詞でもあり得るし、また接続詞でもあり得る、と言えない人、或は、〔文脈からはなれて〕今は「sondern」を動詞として使う文章を作り、次には「sondern」を接続詞として使う文章を作ることの出来ない人、そのような人は単純な学校の問題をこなすことが出来ないであろう。しかし〔実生活においては〕生徒は、文脈からはなれて、語をカクカクに或はシカジカに把握する、ということは要求されていない。或は、如何に彼が語を把握したかを報告する、ということは要求されていない。

ウィトゲンシュタインによれば、意味盲の人は、学校の成績は悪いかも知れないが、実生活においては、大して困りはしないのである。この点について、彼は次のようにも言っている。

『心理学の哲学』I, § 202 : 私が「意味盲」の人の場合を想定したとき、それは、意味の体験は、言語の使用においては、何ら重要性を有してはいないと思われるから、である。したがってまた、意味盲の

人には、たいしたものが失われるはずがないと思われるから、である。

意味体験というものは、語の通常の使用においては、重要ではないのである。

## 8. 語体験ゲーム

語の通常の使用において意味体験は重要でないとするれば、語体験の方はどうであろうか。この点については、ウィトゲンシュタインは次のように言う。

『探究』p.214:「私が詩を、或は物語を、情感を込めて読むときは、それらをただ資料としてさっと目を通すときには生じなかった何かが、とにかく私の内に生ずる。」——[かく言うことで] 私は、どんな事をほのめかしているのか。——[その様なときは] 文は別様に響く。私は声の抑揚に細心の注意をする。[しかし私は] ときおり或る語を、間違ったアクセントで発音し、或は、強調し過ぎたり、しなさ過ぎたりする。私はその事に気づき、そしてそれが私の顔に出る。私は後で、私の朗読の個々の部分について、例えばアクセントの間違いについて、語ることが出来よう。[また、その様な朗読のときは] 私にはある像、いわばある挿絵、が念頭に浮かぶ。確かにこれは、私には、正しい表現で読む、ということの助けになるように思われる。そして私は同様なことを、もっと沢山あげることが出来よう。——私はまたある語に強調を与え、それによってその語の意味を、ほとんどその語があたかも[今問題の] 事柄の像であるかの如くに、残余の[語の] 意味から際立たせる事が出来る。(そして勿論この事は、文の構造によって制限され得る。)

私が表現豊かな朗読においてこの語を発音するとき、その語は全くその意味 (Bedeutung) によって満たされている。——[しからば]「意味が語の使用 (Gebrauch) であるとき、如何にしておかせることがあり得るのか。」さよう、「その語は全くその意味によって満たされている。」という表現は、比喩のつもりであったのである。しかし、私はその比喩を[私の方から] 選んだ訳ではない。その比喩の方から、私



に迫ってきたのである。——しかし、語の比喩的な使用(Verwendung)は、その本来の使用と衝突することなど有り得ない。〔何故なら、もし衝突するような事があれば、比喩的な使用の方を引っ込めればよいのであるから。〕

例えば私が、情感を込めて、「真っ赤な太陽が西に沈むとき、……」と言えば、私には、「真っ赤な太陽」という語に対して、一つの鮮やかな像が浮かび上がる。この体験は、言うまでもなく、語体験である。そして、この様な形で語体験をする試みを、ウィトゲンシュタインは「語体験ゲーム」と言う。さてこの場合、その「真っ赤な太陽」という語は、全くその意味によって満たされている、と感じられる。しかし、このような表現は比喩であるに過ぎないのである。今の例のような語の通常の使用においては、語の意味は、事新しく意識に上ることはない。それは、意識に対しては透明なのである。それは、イメージとかフィーリングのような、体験されるものではないのである。

そうであるとすれば、語体験ゲームというものは、語の通常の使用においては、意味体験と同様に、重要ではないことになる。それゆえウィトゲンシュタインは、次のように言う。

『探究』 p.216：この語体験ゲームを夢と呼べ。それは何も変えはしない。

## 9. 結語

ウィトゲンシュタインは、『探究』 § 43において、「ある言葉の意味とは言語〔ゲーム〕におけるその言葉の使用である」と言ってから後も、繰り返し繰り返し意味の問題に立ち帰ったのは何故であったのか。それは結局、意味とは意味体験とか語体験とかによって体験されるようなものではない、ということを確認したかったからであろう。かくしてウィトゲンシュタインは、結局、次のように言うのである。

『探究』 p.216：ある人が私に言った：「銀行のところで待っていよ。」と。そこで問う：「君は、そう言った時、この銀行を意味(meinen)し

ていたのか。」——この問いは、「君は、彼の所に行く間じゅう、彼にシカジカのことを言おうと意図していたのか。」という問いと同じ種類の問いである。後者の問いは、ある一定の時間に言及している。(即ちそれは、前者の問いが「そう言った時」に言及しているように、「彼の所へ行く間」の時間に言及しているのである。)——しかしそれは、その時間の間における体験には言及していない。[同様に、前者の問いは、そう言った時の体験には言及していないのである。] 意味すること (Meinen) は、意図することがそうであるように、体験ではない。

しからば、何がそれらを体験から区別するのか。——[それは、] それらは体験内容を持っていない [、ということである]。何故なら、それらに随伴し、そしてそれらの挿絵になるような体験内容(例えば、イメージ)は、意味することでも意図することでもないのであるから。

『探究』p. 218：意味する (Meinen) ということは、語に随伴する出来事ではない。何故なら、出来事は意味するということが有する帰結を有し得ないから。

## 10. おわりに

以上において私は、ウィトゲンシュタインが『探究』第Ⅱ部において展開したアスペクトの問題には、特に言及しなかった。ウィトゲンシュタインがアスペクトを問題にしたのは、アスペクトを見る、という体験と、語の意味体験の間には密接な親近性があるからである。彼は次のように言う。

『探究』p. 210：ある任意の文字——例えば $\alpha$ ——について、私は、

それは或る私の知らないアルファベットの厳格に正しく書かれた文字である、と想像することが出来る。しかしまた、それは不正確に書かれた文字であるとも、想像することが出来る；しかも、いろいろな仕方で不正確に：例えば、投げやりであるとか、典型的に子供じみていて不細工であるとか、或は、杓子定規に曲線装飾をつけているとか、といった仕方。その文字は、種々の仕方、正しく書かれたものか

らずれている事があり得よう。——そして、私がその文字について思いめぐらす空想しだいで、私はその文字を種々のアスペクトにおいて見る事が出来る。そしてここに、〔アスペクトを見る、という体験と〕「語の意味(Bedeutung)の体験」との密接な親近性がある。

ウィトゲンシュタインは、語の意味体験という非常に捉えにくいものを捉える一つの手段として、アスペクトを見る、ということ进行考察したのである。彼は、アスペクトを見る、ということ进行比较の対象にして、語の意味体験を捉えようとしたのである。

## 11. 付記(その1)

念のため、『探究』§ 19—20の訳を掲げておく。

『探究』§ 19：戦いにおいて命令と報告のみから成り立っている言語を、人は容易に想像することが出来る。——或は、問いと、〔それに対する〕肯定と否定の表現のみから成り立っている言語を。そしてその他の無数の言語を。——ある言語を想像することは、ある生活の形式を想像することである。

しかし、§ 2の言語の場合はどうであろうか：§ 2における「板！」という叫びは、文であろうか、語であろうか。——もし語であるならば、それは、我々の日常言語における「イタ」と発音される語と同じ意味を有してはいない。何故ならそれは、§ 2においては、まさに叫びであるのだから。しかし、もし文であるならば、それは、我々の〔日常〕言語における「板！」という省略文〔——それは「板を持ってきて！」という文の省略である。——〕と同じではない。〔何故なら、§ 2の言語には、「板を持ってきて！」という文は無いのであるから。〕——「§ 2における「板！」という叫びは、文であろうか、語であろうか。」という問いに関する限り、君は「板！」を、語であるとも、文であるとも、言うことが出来る；それは、おそらく適切には、(「退化した双曲線」という言い方にならって)「退化した文」と言うのがよいであろう。しかもそれは、そうは言っても、まさに我々の「省略」文であろう。——しかし「省略」文とは、やはり、「板を持ってきて！」

という文の短縮形であるに過ぎない。しかもこの「板を持ってきて！」という文は、§ 2には存在しないのである。——しかし、何故私は逆にこの「板を持ってきて！」という文を「板！」という文の引き延ばしと言ってはならないのか。——何故なら、「板！」と叫ぶ人は、本来は「板を持ってきて！」という事を意味しているのであるから。——しかし、如何にして君は、「板！」と言うとき、「板を持ってきて！」という事を意味しているのか。君は「板を持ってきて！」という文を内心自分に言い聞かせているのか。そして何故私は、「板！」という叫びで意味することを言うのに、「板！」という表現を別の表現に言い換えなくてはならないのか。そして、もし「板！」と「板を持ってきて！」が同じ事を意味しているならば、——何故私は、「彼が「板！」」と言うとき、彼は「板！」を意味している。」と言ってはならないのか。或は、何故君は、「[板！」と言って]「板を持ってきて！」を意味することが出来るとき、「板！」を意味することが出来ないのか。——しかし、私が「板！」と叫ぶとき、私が思っていることは、彼は私に板を持ってこなくてはならない！ということである。——確かに、そうである。しかし「その思い」は、君が言った「[板！」という]文とは違った文を、何らかの形で、考えている、という事において成り立っているのであろうか。——

『探究』§ 20：しかし、ある人が「板を持ってきて！(Bring mir eine Platte!)」と言うとき、そのように言う事は、今や、彼はこの表現を一語の「板！」に対応した一つの長い語であると思ひ得るかの如くに、見える。——したがって人は、この表現を、或るときは一つの語として、また或るときは四つの語として、考えることが出来るのか。そして人は、通常それをどう考えるのか。——私が思うに、我々は以下のように言いたくなるであらう：もし「板を持ってきて！(Bring mir eine Platte!)」という文を他の様々な文——例えば、「私に板を手渡して！」、「彼に板を渡して！」、「板を2枚持ってきて！」、等々——と対比して使用するときには；それ故、もしその文を、それを構成している語が含まれている他の文と対比して使用するときには；我々は、その文を、四つの語によって作られた文として考える。——しかれば、或る文を他の文と対比して使用する、という事はどういうこと

か。それは、その際例えばその「他の文」が念頭に浮かぶということか。しかも、全ての「他の文」が。そして、人が「或る文」を言っている間中、或はその前、或は後に。——違う！たとえその様な説明が我々にとって幾らか魅力的であるとしても、実際に起こっている事について、ちょっと考察しさえすれば、その様な説明が間違えであることは見て取れる。我々が、「板を持ってきて！」という命令を他の様な文と対比して使用する、と言うのは、我々の言語がその様な他の文の可能性を含んでいるから、である。我々の言語を理解していない外国人が、人が「板を持ってきて！」という命令を与えているのをしばしば見聞すれば、その外国人は、この「イタラモッテキテ」という音の列の全体が一つの語であり、そしてそれは、その外国人の国の言葉では例えば「建築石」に当たる、と思うかもしれない。後に、もしその外国人自身がその命令を与えるとすれば、彼はおそらくその命令を、我々とは違って発音するであろう。そして我々は言うであろう：彼がその命令をその様に奇妙に発音するのは、彼はその命令を一語であると思っているからである。——しかしそうすると、彼がその命令を発しているとき、彼がその文を一語であると思っている事に対応して、何かもっと別の事も彼の内に起こっていないであろうか。——彼の内には、〔我々と〕同じ事が起こり得る。或はまた、〔我々とは〕別の事も。それでは、君が「板を持ってきて！(Bring mir eine Platte!)」といった命令を与えるとき、君の中に何が起るか；君がこの命令を言っているとき、それは四語から成り立っている、という事を君は意識するか。勿論君は、——〔その命令のみならず、それが対比される〕その他の文をも含む——この言語〔ドイツ語〕をマスターしている。しかし、君がその命令を言っているとき、この「言語をマスターしているという事」が何らかの仕方で「生ずる」であろうか。——そして確かに私は次のような事を認めた：その命令を〔我々とは〕別に把握した外国人は、その命令をおそらく〔我々とは〕別に発音するであろう；しかし我々が、〔外国人が我々とは別の〕間違って把握した、と呼ぶ事は、その命令に随伴する何らかのものの中に、無くてはならないのではない。

文が「省略」文であるというのは、それを言うときに我々が意味している事の何かを、それが〔字面の上で〕抜かしているから、ではな

い。文が「省略」文であるというのは、それが——我々の文法における或る一定の手本と比べて——短縮されているから、なのである。勿論ここで、人は次のように反論することが出来よう：「君は、短縮された文と短縮されない文は同じ意味(Sinn)を有している、ということを確認する。しからば、この「同じ」意味に対する言語表現はないのであろうか。」——しかし、二つの文が同じ意味を有するということは、それらが同じ使用(Verwendung)を有する、ということではないのか。——(ロシア語においては、「この石は赤い。(Der Stein ist rot.)」と言う代わりに、「石赤い(Stein rot.)」と言う；繫辭はロシア人達には無意味なのであろうか、或は、彼らは繫辭を付けて加えて考えているのであろうか。)

なお、一言注意すると、『探究』§ 19の中に、「退化した双曲線(degenerierte Hyperbel)」という語がある。これは、次のような事ではないかと思われる：双曲線

$$x^2/a^2 - y^2/b^2 = 1$$

には、2本の相交わる漸近線

$$x/a + y/b = 0, \quad x/a - y/b = 0$$

がある。そして、 $a \rightarrow 0, b \rightarrow 0$  のとき、その双曲線はそれが有する2本の相交わる漸近線に限りなく近づく。その意味で、「2本の相交わる漸近線」は「退化した双曲線」である、と言える。即ち、「退化した双曲線」とは「2本の相交わる漸近線」のことではないのか。

## 12. 付記(その2)

「意味(Bedeutung)」と言うとき、「第一次的意味(primäre Bedeutung)」と「第二次的意味(sekundäre Bedeutung)」が区別されることがある。ウィトゲンシュタインは次のように言っている。

『探究』p. 216：「太っている」という概念と「痩せている」という概念が与えられたとき、君はどちらかというとき、「水曜日は太っていて、火曜日は痩せている。」と言う傾向にあるのであろうか、或はその逆であらうか。(私は、前者のように言う傾向にある。) さてここでは、「太っている」という語と「痩せている」という語は、通常の意

味(Bedeutung)とは別の意味(Bedeutung)を有するのであろうか。——  
〔確かに〕それらは〔通常の使用とは〕別の使用(Verwendung)を有している。——それでは、私は本来〔ここでは〕別の語を使用すべきであったのか。いや、確かにそうではない。——私はこれらの語を(私に馴染み深い意味でもって) ここで使用したいのである。——いま私は、  
〔私は「水曜日は太っていて、火曜日は痩せている。」と言う傾向にある、といった〕この現象の原因については、何も言っていない。その原因は、私の幼少時代からの連想であるかもしれない。しかし、それは仮説〔による説明〕である。その説明がなんであれ、——〔とにかく〕その様な傾向は存在するのである。

「ここで君は、「太っている」という語と「痩せている」という語でもって、本来何を意味している (meinen) のか。」と問われれば、——私はそれらの語の意味(Bedeutung)を、全く通常の仕方によってのみ、説明する事が出来るであろう。〔即ち〕私はそれらの語の意味 (Bedeutung) を、水曜日と火曜日の例でもって示すということは、出来ないであろう。

人はここで、語の「第一次的」意味と「第二次的」意味について、語ることが出来る。人は、第一次の意味を有する語のみを、第二次の意味で使用するのである。

第二次の意味は「転用 (übertragen) された」意味ではない。私が「母音 e は私には黄色い。」と言うとき、私は、「黄色い」という語を、転用された意味で考えているのではない。——何故なら私は、私が言いたい事を、「黄色い」という〔通常の〕概念によってより他には、全く表現し得ないであろうから。

語の意味というものは、おそらく、第二次の意味を通して、徐々に変わって行くのであろう。

(この論文は、1989年4月21日、成城大学において行なわれた「第二回ウィトゲンシュタイン・シンポジウム——生誕100年記念——」での

シンポジウム『『探究』第Ⅱ部をどう読むか』における発表のためのものである。)